



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 中学生における生徒エージェンシーの関連要因および中学生が重視するウェルビーイングの分野

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 扇原, 貴志, 柄本, 健太郎, 押尾, 恵吾 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/152461">http://hdl.handle.net/2309/152461</a>

# 中学生における生徒エージェンシーの関連要因および中学生が重視するウェルビーイングの分野

扇原 貴志\*・柄本 健太郎\*・押尾 恵吾\*

次世代教育研究推進機構

(2019年9月17日受理)

## 1. 問題

### 1. 1 生徒エージェンシーについて

本研究の第1の目的は、経済協力開発機構 (Organisation for Economic Co-operation and Development; OECD) が提案した生徒エージェンシーを測定する尺度を作成し、それと関連する要因について探索的に検討することである。

これまで、OECDは“OECD Future of Education and Skills 2030”プロジェクト (以下 Education2030 とする) を2015年から進めてきた。Education2030は、2030年という近い将来において、子どもたちに求められるコンピテンシー (資質・能力) とその育成方法などについて検討しようとする国際的な枠組みである<sup>1)</sup>。

OECDは、Education2030を進める中で、コンピテンシーの他にも、エージェンシー (agency)<sup>注1)</sup> という概念を提唱した。エージェンシーには、共同エージェンシー (co-agency)、道徳的エージェンシー (moral agency)、経済的エージェンシー (economic agency) など、多様な形態が存在するとしているが、特に学習場面において生徒が有するエージェンシーの総体として、生徒エージェンシー (student agency) という概念を提唱している。生徒エージェンシーは、「変革を起こすために目標を設定し、ふり返りながら責任ある行動をとる能力」と定義される<sup>2)</sup>。つまり、自ら積極的に学びの主体 (agent) となり、他者の判断や選択に左右されることなく、責任をもって自身の学習の目標を設定し、学習をふり返りながら学びを進めていく能力のことをいう。生徒エージェンシーは、

生徒が自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与えうる能力と意志を持っているという原則に基づいており、社会や文化によって多様で、生涯発達していく概念であるとされる<sup>3)</sup>。

Education2030の中間報告というべきポジション・ペーパー (日本語版) では、日本の教育基本法第2条第3項にある「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」という条文を生徒エージェンシーの考え方に合致するものであるとしている<sup>4)</sup>。すなわち、学びの方法を学び、生涯にわたる学習者となって、社会を発展させていく力を獲得させることを目指す義務教育段階において、生徒エージェンシーを涵養することは、日本の教育が果たすべき使命の1つであるとも考えられるだろう。

生徒エージェンシーは、2019年にOECDから大まかな定義が示されたばかりの新しい概念である。そのため、これを測定し、どのような要因が関連しているのか検討した研究は存在しない。そこで本研究では、まず、OECDの定義に基づき、生徒エージェンシーの程度を測定する尺度を試作し、測定を試みることにした。

なお、本研究の対象は、質問紙調査における質問や教示を十分に理解して回答できることを重視し、中学生とした。

### 1. 2 生徒エージェンシーの関連要因

#### 1. 2. 1 コンピテンシーとの関連

本研究では、生徒エージェンシーの関連要因についても探索的に検討する。

OECDは、エージェンシーとコンピテンシー (以下

\* 東京学芸大学 次世代教育研究推進機構 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

で詳述する)の間には強い関連があることを示唆しており、エージェンシーは生徒が学習し、フィードバックを受け、学習のふり返りを行う中で育成できるとしている<sup>5)</sup>。したがって、エージェンシーはコンピテンシーとともに日々の学習の中で育成されると考えられる。よって、エージェンシーとコンピテンシーの間には関連が見られることが予想される。

コンピテンシーは資質・能力とも呼ばれ、その枠組み (framework) としては、OECD DeSeCoのキー・コンピテンシー<sup>6)</sup>、ATC21Sの21世紀型スキル<sup>7)</sup>などがこれまで提唱されてきた。枠組みとしては複数存在するものの、いずれの文献においても汎用性のある認知・社会的スキル (以下、汎用的スキルとする) と、何らかの態度・価値の育成が共通して含まれている<sup>8)</sup>。

こうした潮流の中で、関口は、児童・生徒の学習におけるコンピテンシーの構成要素を明らかにすることを目的に、教科教育を専門とする大学教員に各教科等で育成可能なコンピテンシーについて自由記述による調査を行った<sup>9)</sup>。得られた回答を汎用的スキルと態度・価値の2側面について、それぞれカテゴリー分類した結果、汎用的スキルには「批判的思考力」「問題解決力」「協働する力」「伝える力」「先を見通す力」「感性・表現・創造の力」「メタ認知力」という7つの下位概念が存在し、態度・価値には「愛する心」「他者に対する受容・共感・敬意」「協力しあう心」「好奇心・探究心」「困難を乗り越える力」「向上心」「正しくあろうとする心」「より良い社会への意識」という8つの下位概念が存在することを示した。そして、各概念についてその定義を記した。

続いて、関口は汎用的スキル、態度・価値の各下位概念に対応した尺度を作成した。汎用的スキルについては21項目を作成し、態度・価値については16項目を作成した。なお、「愛する心」は対象が多岐にわたり質問が難しいといった理由により、測定対象から除外している。その上で、中学1、2年生を対象にコンピテンシーの程度を測定した<sup>10)</sup>。

以上のように、コンピテンシーの程度を測定する試みはすでになされており、尺度も作成されている。そこで本研究では、エージェンシーの概念や定義に照らして、特に関連が見られそうなコンピテンシーとして、「メタ認知力」「協働する力」「より良い社会への意識」を取り上げることとする。なぜなら、これらの3下位尺度は生徒エージェンシーの定義にある、学習に対して自ら目標を設定し、ふり返り、責任をもって社会を変えていこうとする部分と特に関連が深いと考えられるためである。また、生徒エージェンシーと

ともに重要視されている共同エージェンシーでは、他の生徒や教師、保護者や地域住民と協働して学びに向かう姿勢が重視されており、生徒エージェンシーと「協働する力」との関連を検討することは、今後の研究に向けた示唆を得ることにつながると考えられるためである。生徒エージェンシーとコンピテンシーの関連を検討することにより、日々の学習の中で培っている汎用的スキルや態度・価値と生徒エージェンシーの関連の様相を明らかにすることができるだろう。

## 1. 2. 2 知識獲得量の自己評価との関連

OECDによる非認知的スキル (社会情動的スキル) と認知的スキルとの関連を検討した研究によれば、非認知的スキルの状態は認知的スキルの状態を予測するという関係性が見られた一方、認知的スキルが非認知的スキルの状態を予測するという関係性は見られなかったとしている<sup>11)</sup>。この結果をそのまま解釈すれば、認知的スキルの程度や育成可能性は非認知的スキルの育成状態によるところが大きく、学校教育において認知的スキルを高めるためには、まず非認知的スキルを重視して育成すればよいと捉えることもできる。一方、他の解釈としては、OECDの先行研究は、あくまで認知的スキルの状態が非認知的スキルの状態を予測しないと指摘しているのみであり、認知的スキルを高めることが非認知的スキルの状態に悪影響を及ぼすとはまでは言及していないとも読み取れる。

学校は知識量に代表されるような認知的な力の育成も目指す場であることは事実であり (学習指導要領の3つの柱のうち、「知識及び技能」「思考力・表現力・判断力等」とも関連する)、そうした社会的要求も強い。もし知識量に代表されるような認知的な力の獲得が、非認知的スキルも含むと思われる生徒エージェンシーの育成を促進する、もしくは、少なくとも阻害しないという関係性を見出すことができれば、知識を高めるために行われている現在の学校教育もまた、児童・生徒の教育にとって重要であるという論拠を示すことができる。

そこで本研究では、中学生を対象に、学期末に当該学期で獲得した知識量についての自己評価を求め、それと生徒エージェンシーとの関連を検討することとする。これにより、知識を獲得することが、生徒エージェンシーの高まりにどのような影響を与えているのか検討することができる。

## 1. 3 生徒が重視するウェルビーイング

OECDは、生徒エージェンシーを育むことは、生徒

のウェルビーイング (well-being) を高めることにもつながると指摘しており, エージェンシーを高める目的の1つは, 個々人のウェルビーイングを高めることであるとしている<sup>12)</sup>。OECDは, ウェルビーイングに関わる「より良い暮らしの指標」(Better Life Index)として11の分野をあげている。すなわち, 「住居」(住環境, かかる費用), 「収入」(収入と経済的豊かさ), 「仕事」(所得, 雇用), 「コミュニティ」(社会的なサポートの質), 「教育」(受ける教育とその結果), 「環境」(周囲の環境の質), 「市民参加」(民主主義への関わり), 「健康」(どれくらい健康か), 「幸福感」(どれくらい幸せか), 「個人の安全」(どれくらい安全か), 「ワークライフバランス」(仕事と遊びのバランス)である<sup>13)</sup>。

しかし, 実際に, 生徒がBetter Life Indexのどの分野のウェルビーイングを重視して生活しているのか, ウェルビーイングをどのように捉えているのか検討した研究は, 管見の限り見当たらない。そこで本研究では, 生徒エージェンシーと関係が深いとされるウェルビーイングについて, 社会をより良く生きる上で, 生徒はどの分野のウェルビーイングを重視しているのか, 分野間でどのような対応関係があるのか検討することを第2の目的とする。

これにより, 日本の中学生が日々の生活の中で重視しているウェルビーイングとその関係を検討することができ, 将来的に生徒エージェンシーとウェルビーイングの関係性をより深く検討する際の基礎的資料を得ることができる。

#### 1. 4 目的

以上を踏まえ, 本研究ではまず, 生徒エージェンシーの程度とコンピテンシーおよび知識獲得量の自己評価との関連を検討し, コンピテンシーおよび知識獲得量の自己評価が生徒エージェンシーの程度に及ぼす影響について検討することを第1の目的とした。そして, 中学生が社会をより良く生きる上で大事だと考えるウェルビーイングの分野を明らかにすることを第2の目的とした。

## 2. 方法

### 2. 1 調査対象・時期・手続き

北信越地方の国立大学附属中学校1校の生徒347名(1年生118名, 2年生112名, 3年生117名; 性別不問)を対象とした質問紙調査を実施した。調査は2019年7月の1学期末に実施され, 当該学期の学習状況をふり返って自己評価するように教示した。

調査は各学級のホームルームの時間に実施された。

学級担任教員が質問紙を配布し, 生徒はその場で回答した。質問紙は回答終了後, ただちに回収された。

### 2. 2 質問紙の構成

#### 2. 2. 1 エージェンシー尺度

OECDの定義を基に, 生徒エージェンシーを測定するための項目を作成した。具体的には, 学習の「目標設定」, 「ふり返り」, 「責任感・自己決定」という3つの視点から, 各視点につき1項目, 合計3項目を作成した。項目作成に当たっては, 教育学および心理学を専門とする大学教員・研究員3名と, 調査実施中学校の教員1名が協議・確認しながら行った。

#### 2. 2. 2 コンピテンシー尺度

関口が作成した生徒のコンピテンシー(資質・能力)を測定する尺度<sup>14)</sup>のうち, 「メタ認知力」(2項目), 「協働する力」(3項目), 「より良い社会への意識」(2項目)の3つの下位尺度を用いた。

なお, 大学教員1名と調査実施中学校の教員1名が協議し, 生徒が回答しやすいように, 項目の文頭・文末表現等をわずかに修正した。

#### 2. 2. 3 知識獲得量の自己評価

生徒が当該学期の学習状況をふり返り, どの程度, 知識を獲得したと思うかについて1項目で尋ねた。

以上の各尺度および項目はいずれも6段階評定(1. 「非常に当てはまらない」, 2. 「かなり当てはまらない」, 3. 「少し当てはまらない」, 4. 「少し当てはまる」, 5. 「かなり当てはまる」, 6. 「非常に当てはまる」)で尋ねた。使用した尺度および項目を表1に示す。

#### 2. 2. 4 社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイング

上述のOECDが提唱したウェルビーイングの指標(Better Life Index)11分野をそれぞれ提示した。その際, 11分野それぞれで「住居(住環境, かかる費用)」, 「収入(収入と経済的豊かさ)」, ……のようにキーワードと短い説明を併せて提示した。そして, 社会でより良く生きる上で大事だと思うものを3つ選び, 1位から3位まで順位づけするように求めた。

## 3. 結果

### 3. 1 各下位尺度・項目の平均値, 信頼性係数および学年差

まず, 下位尺度ごとに項目の合計点を項目数で除し

表1 本研究で使用した尺度および項目

1. 生徒エージェンシー測定尺度	
1	学習をするうえでの自分の目標を決めることができた。
2	学習したことを次の活動のためにふり返ることができた。
3	学習したことを活かして、責任をもって活動したり、何かを決めたり選んだりできた。
2. コンピテンシー尺度	
(1) メタ認知力	
1	授業での学びや活動の途中、またはそれが終わった後で、「何が分かって、何が分からなかったか」「どれくらいうまくやっているか」など、自分の理解の程度や達成度を自分自身で感じとることができた。
2	授業での学びや活動の中で、分からなかったり、うまくできないことがあった場合に、教科書を見直したり、その理由を考えたり、違うやり方を試したりなど、良く分かるための工夫や、良くできるための工夫をすることができた。
(2) 協働する力	
1	授業での話し合いやグループ活動の中で、自分以外の人の意見を聞こうとしたり、自分とは意見が違う人とも、グループの目標達成のために前向きに話し合いをすることができた。
2	授業での話し合いやグループ活動の中で、「自分が何をすれば みんなの役に立つか」を考えて、その行動をすることができた。
3	授業での話し合いやグループ活動の中で、他のメンバーが困っていたり、うまくいっていない場合などに助けてあげることができた。
(3) より良い社会への意識	
1	授業での学びや活動の中で、多くのことを学んだり、考えたりすることで、人々の暮らしを変えたり、社会をより良くする人になりたいと思った。
2	授業での学びや活動の中で、今までのやり方を見直したり、新しい取り組みを提案したりすることで、学校やクラス、授業をより良く変えていきたいと思った。
3. 知識獲得量の自己評価	
1	授業での学びや活動の中で、知識をたくさん得ることができた。

表2 各下位尺度の平均値、信頼性係数および学年別に見た平均値の分散分析結果

下位尺度・項目		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>a</i>	<i>F</i> ( <i>df</i> =2)	$\eta^2$	多重比較 (Tukey 法)
生徒エージェンシー (3項目)	3学年全体 ( <i>n</i> =344)	4.74	0.85	.83	2.47	.02	
	1年生 ( <i>n</i> =116)	4.73	0.98				
	2年生 ( <i>n</i> =112)	4.87	0.74				
	3年生 ( <i>n</i> =116)	4.62	0.80				
メタ認知力 (2項目)	3学年全体 ( <i>n</i> =346)	4.91	0.91	.72	1.28	.01	
	1年生 ( <i>n</i> =117)	4.84	1.00				
	2年生 ( <i>n</i> =112)	5.02	0.81				
	3年生 ( <i>n</i> =117)	4.86	0.88				
協働する力 (3項目)	3学年全体 ( <i>n</i> =346)	4.85	0.90	.81	4.18*	.02	1年生・3年生<2年生*
	1年生 ( <i>n</i> =118)	4.77	1.03				
	2年生 ( <i>n</i> =112)	5.05	0.78				
	3年生 ( <i>n</i> =116)	4.74	0.86				
より良い社会への意識 (2項目)	3学年全体 ( <i>n</i> =344)	4.71	1.03	.74	3.20*	.02	3年生<2年生*
	1年生 ( <i>n</i> =117)	4.76	1.11				
	2年生 ( <i>n</i> =110)	4.85	0.97				
	3年生 ( <i>n</i> =117)	4.52	0.99				
知識獲得量の自己評価 (1項目)	3学年全体 ( <i>n</i> =347)	5.30	0.96	—	1.39	.01	
	1年生 ( <i>n</i> =118)	5.27	1.09				
	2年生 ( <i>n</i> =112)	5.42	0.92				
	3年生 ( <i>n</i> =117)	5.21	0.86				

\**p*<.05



表3 各下位尺度間の相関係数(全体・学年別)

		メタ認知力	協働する力	より良い社会への意識	知識獲得量の自己評価
生徒エージェンシー	3学年全体	.66 ***	.66 ***	.65 ***	.62 ***
	1年生	.71 ***	.74 ***	.76 ***	.67 ***
	2年生	.54 ***	.58 ***	.62 ***	.51 ***
	3年生	.70 ***	.60 ***	.52 ***	.64 ***
メタ認知力	3学年全体	1	.63 ***	.58 ***	.66 ***
	1年生	1	.68 ***	.69 ***	.69 ***
	2年生	1	.63 ***	.56 ***	.61 ***
	3年生	1	.55 ***	.45 ***	.66 ***
協働する力	3学年全体		1	.71 ***	.69 ***
	1年生		1	.77 ***	.74 ***
	2年生		1	.71 ***	.69 ***
	3年生		1	.62 ***	.60 ***
より良い社会への意識	3学年全体			1	.60 ***
	1年生			1	.71 ***
	2年生			1	.62 ***
	3年生			1	.43 ***

\*\*\* $p < .001$

た値を算出し、これを下位尺度得点とした。

各下位尺度の平均値、標準偏差、信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ 係数)を算出した。学年ごとにも平均値を算出し、学年差を検討するため、1要因の分散分析を行った(表2)。

その結果、まず、信頼性係数の値を見ると、 $\alpha = .72$ 以上であり、十分な内的整合性が示された。特に、生徒エージェンシーは $\alpha = .83$ であり、高い内的整合性が示された。

学年別に算出した平均値の分散分析結果を見ると、「協働する力」、「より良い社会への意識」で有意な主効果が見られた。多重比較(Tukey法)の結果、「協働する力」では、1年生および3年生よりも2年生の方が得点は高く、「より良い社会への意識」では、3年生よりも2年生の方が得点は高かった。ただし、いずれの下位尺度においても効果量は非常に小さかった。

### 3. 2 各下位尺度・項目間の相関係数

各下位尺度・項目間の関連を検討するため、相関係数を算出し、学年別にも算出した(表3)。なお、欠損値の処理についてはペアワイズ削除を用いた。

その結果、3学年全体では、生徒エージェンシーと他の尺度・項目との間には、中程度から強い正の相関が見られた。学年別に見ると、生徒エージェンシーと「メタ認知力」との間では、1年生は相関が強かったが、2年生はそれより弱く、3年生は1年生と同様に強かった。「協働する力」との間では、1年生の相関

が強く、2年生、3年生はそれと比べると弱くなっていた。「より良い社会への意識」との間では、1年生で最も相関が強く、2年生、3年生となるにつれて相関は弱くなっていた。知識獲得量の自己評価との間では、1年生と3年生で中程度の相関が見られたが、2年生はそれらに比べると相関はやや弱かった。

以上より、生徒エージェンシーとコンピテンシーおよび知識獲得量の自己評価の間には正の相関が見られ、学年によって相関の強さには差があることが示された。

また、コンピテンシー間やコンピテンシーと知識獲得量の自己評価の間では、おおむね中程度からやや強い正の相関が見られた。

### 3. 3 重回帰分析

各尺度・項目間で相関が見られたことを踏まえ、コンピテンシーと知識獲得量が生徒エージェンシーに及ぼす影響について検討するため、「メタ認知力」、「協働する力」、「より良い社会への意識」、知識獲得量の自己評価を説明変数、生徒エージェンシーを目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を3学年全体と学年別を実施した(図1-4)。なお、VIFはいずれの分析においても3未満であり、多重共線性の影響はないと判断した。また、欠損値の処理についてはリストワイズ削除を用いた。

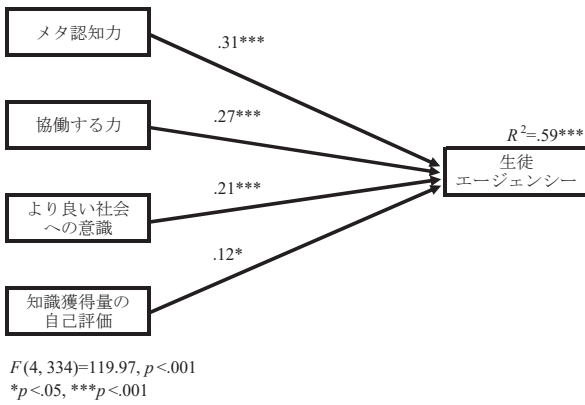


図1 3学年全体の重回帰分析結果

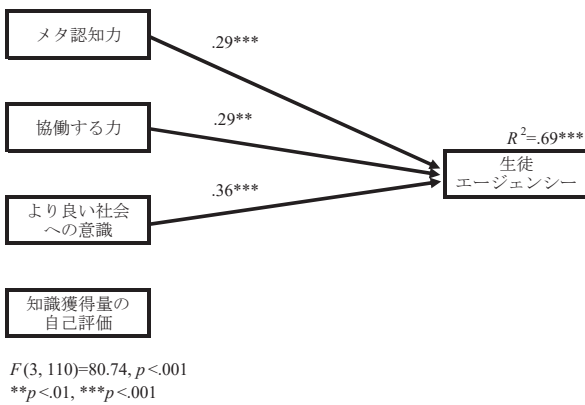


図2 1年生の重回帰分析結果

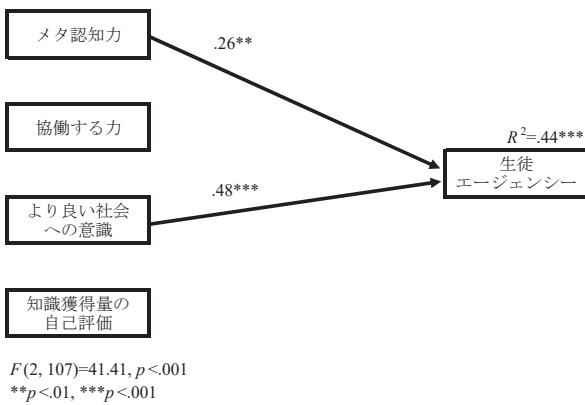


図3 2年生の重回帰分析結果

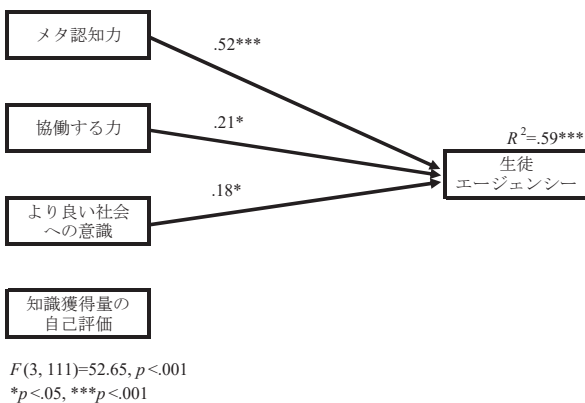


図4 3年生の重回帰分析結果

まず、3学年全体の結果では、すべての説明変数が生徒エージェンシーに対して正の影響を与えていた。その中でも、「メタ認知力」の標準偏回帰係数の値が最も高かった。

学年別の結果では、1年生は、「メタ認知力」、「協働する力」、「より良い社会への意識」から正の影響が見られ、「メタ認知力」や「協働する力」よりも、「より良い社会への意識」の方が強い影響力を持っていた。2年生は、「メタ認知力」と「よりよい社会への意識」からのみ正の影響が見られ、「メタ認知力」よりも、「より良い社会への意識」の影響の方が強かった。なお、2年生は他の学年と異なり、「協働する力」の影響は見られなかった。3年生は、「メタ認知力」、「協働する力」、「より良い社会への意識」から正の影響が見られ、「メタ認知力」の影響が最も強く、「より良い社会への意識」の影響は小さかった。

なお、学年別に分析した場合、いずれの学年においても知識獲得量の自己評価から生徒エージェンシーへの影響は見られなかった。

### 3. 4 生徒が大事だと思うウェルビーイングの選択数

生徒が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングについて、11の分野ごとに上位3つを選び、順位づけしてもらった。1位から3位の選択数と選択率を算出した結果を表4に示す。

1位として最も選択されていたものは幸福感で、次いで収入、健康といった順であった。2位として最も選択されていたものは収入で、次いで幸福感、健康といった順であった。3位として最も選択されていたものは収入と幸福感（同数）で、次いでワークライフバランスといった順であった。

しかし、大事だと思うウェルビーイングの選択に当たって、上位3つまで選択するように求めたが、相当数（25名；全体の7.2%）が順位をつけるのではなく、分野に丸をつけて3つ選択するのみで順位を回答していなかったり、各分野を何段階かで評定したりするなど指定外の回答をしていた。つまり、質問の意図が十分に伝わっていなかった可能性が考えられた。そこで、単純に各分野の選択数と選択率を算出した（表5）<sup>注2)</sup>。

その結果、幸福感、収入、健康が大事なものとして多く選択されていた。また、仕事、ワークライフバランス、環境も比較的多く選択されていた。一方で、市民参加の選択数は非常に少なかった。

表4 より良く生きる上で大事だと思うものの順位別選択数と選択率（上位3つを選択して順位づけ）

要素		1位	2位	3位	非選択	合計
住居	度数	9	15	17	290	331
	%	2.42%	4.03%	4.57%	86.83%	100%
収入	度数	58	53	51	161	323
	%	11.96%	10.93%	10.52%	48.20%	100%
仕事	度数	28	38	28	228	322
	%	6.73%	9.13%	6.73%	68.26%	100%
コミュニティ	度数	19	16	10	285	330
	%	5.07%	4.27%	2.67%	85.33%	100%
教育	度数	15	19	21	278	333
	%	3.87%	4.90%	5.41%	83.23%	100%
環境	度数	17	27	34	248	326
	%	4.21%	6.68%	8.42%	74.25%	100%
市民参加	度数	6	3	7	317	333
	%	1.72%	0.86%	2.01%	94.91%	100%
健康	度数	46	47	36	199	328
	%	10.07%	10.28%	7.88%	59.40%	100%
幸福感	度数	70	52	51	148	321
	%	14.17%	10.53%	10.32%	44.31%	100%
個人の安全	度数	21	20	18	272	331
	%	5.38%	5.13%	4.62%	81.44%	100%
ワークライフバランス	度数	25	22	38	245	330
	%	6.02%	5.30%	9.16%	73.35%	100%

表5 より良く生きる上で大事だと思うものの選択数と選択率（3つまで選択）

要素	選択数 選択率	非選択数 非選択率	合計
住居	44 13.17%	290 86.83%	334 100%
収入	173 51.80%	161 48.20%	334 100%
仕事	105 31.44%	229 68.56%	334 100%
コミュニティ	49 14.67%	285 85.33%	334 100%
教育	56 16.77%	278 83.23%	334 100%
環境	86 25.75%	248 74.25%	334 100%
市民参加	17 5.09%	317 94.91%	334 100%
健康	135 40.42%	199 59.58%	334 100%
幸福感	186 55.69%	148 44.31%	334 100%
個人の安全	62 18.56%	272 81.44%	334 100%
ワークライフ バランス	89 26.65%	245 73.35%	334 100%

表6 中学生が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングの分野のコーレスポネンズ分析結果

	カテゴリースコア	
	次元1 自己実現性	次元2 公共性
住居	-2.35	1.14
収入	-0.41	0.70
仕事	-0.40	1.33
コミュニティ	2.46	-0.17
教育	0.92	0.72
環境	0.22	0.02
市民参加	4.44	2.34
健康	-0.10	-0.89
幸福感	-0.33	-0.33
個人の安全	-0.08	-2.53
ワークライフバランス	0.33	-0.53
固有値	0.39	0.33
寄与率	14.79	12.32
累積寄与率	14.79	27.11

### 3. 5 生徒が大事だと思うウェルビーイングの対応関係

生徒が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングの反応パターンの対応関係について検討するため、回答をウェルビーイングの11分野のそれぞれにおいて「選択あり」・「選択なし」の2値にコード化し、コーレスポネンズ分析を行った（表6）。累



積寄与率からより多くの次元が存在することが考えられたが、解釈可能性や解釈の容易さから2次元を採用した。

第1次元は、プラス方向に行くほど、自己実現や社会での成功の程度が高くなり、マイナス方向に行くほど、安全性の欲求や生理的な欲求の程度が高くなっていった。そこで、「自己実現性」と命名した。

第2次元は、プラス方向に行くほど、より社会参画に向かう程度が高くなり、マイナス方向に行くほど、より生活における私的な分野の程度が高くなっていった。そこで、「公共性」と命名した。

続いて、カテゴリースコア(重み)を図にプロットした(図5)。図を見ると、上部には生活を営む上で必要なウェルビーイングの分野が集まっており、下部には安全で健康に生活する上で必要な分野が集まっていた。さらに、右側には社会とのつながりと関係する分野が集まっていた。したがって、中学生が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングの分野は3パターンに分かれる可能性が示された。

また、第1象限には社会参画や公共的な分野が集まっており、第2象限には生活していく上で不可欠な分野が集まっていた。第3象限には個人の健康や安全に関する分野が集まっており、第4象限には周囲や仕事と私生活との調和に関する分野が集まっていた。

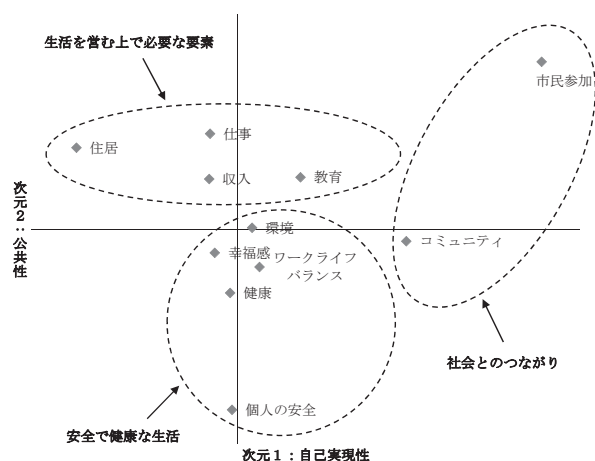


図5 コレスpondens分析結果のプロット図

## 4. 考察

### 4. 1 生徒エージェンシー尺度について

今回、3項目で測定した生徒エージェンシー尺度の信頼性について、信頼性係数を用いて検討した結果、十分な値が得られ、尺度の内的整合性は高いことが示された。したがって、今回作成した尺度は生徒エージェンシーを測定する尺度として使用可能であると判

断できる。

ただし、本研究では、尺度の信頼性は信頼性係数のみに基づいて検討した。よって、今後は再検査法等の方法を用いて尺度の信頼性について詳しく検討していく必要がある。

また、本研究では、新たな概念である生徒エージェンシーを探索的に検討したため、類似概念を測定し、関連を検討するという併存的妥当性の確認は行わなかった。この点については今後、学習の自律性や学習の動機づけ(例えば、西村・河村・櫻井の自律的学習動機尺度<sup>15)</sup>)などとの関連を検討することにより、明らかにしていくことができるだろう。

上記のような制限がありつつも、新しい概念である生徒エージェンシーの測定を試みた本研究は、今後の研究に向けて基礎的資料を提供するという点で一定の意義があるといえるだろう。

### 4. 2 生徒エージェンシー、コンピテンシー、知識獲得量の自己評価の学年差について

生徒エージェンシー、コンピテンシー(「メタ認知力」,「協働する力」,「より良い社会への意識」),知識獲得量の自己評価について、学年によって平均値差が見られるか分散分析により検討した。その結果、「協働する力」と「より良い社会への意識」においては、2年生は他の学年よりも得点が有意に高かった。しかし、効果量は非常に小さく、実質的な平均値差は存在しない可能性が高いといえる。

生徒エージェンシーにおいては学年差が見られなかった。よって、生徒エージェンシーは個人が持つ資質として、学年に関係なく、個人差が存在するものであることが示された。学年差が見られなかった理由の1つは、4月からの各学年で実施された教育活動が等しく効果を発揮したという点がまず考えられる。その他にも、本研究は国立大学附属中学校で実施されたものであり、入学の時点で選抜が行われている点が考えられる。すなわち、入学時点ですでに学習意欲が高く、自律的な学習が可能であるという意味での生徒エージェンシーが十分に高い生徒が一定数存在したために、学年差が見られなかった可能性がある。加えて、エージェンシーの萌芽は幼少期から出現するとされており<sup>16)</sup>、今回研究対象となった生徒たちは学習をするために十分なエージェンシーを入学前にかんりの程度獲得している可能性もある。こうした点については、今後、他の学校、例えば公立中学校にも対象を広げて調査を実施することで精査していく必要がある。

#### 4. 3 生徒エージェンシーの関連要因について

3学年全体の結果では、生徒エージェンシーとコンピテンシーおよび知識獲得量の自己評価の間には中程度から強い正の相関が見られ、重回帰分析の結果、すべてのコンピテンシーおよび知識獲得量から生徒エージェンシーに正の影響が見られた。よって、生徒エージェンシーとコンピテンシーの間には関連が見られるとするOECDの主張<sup>17)</sup>は支持されたといえる。生徒が日々の学習を通してコンピテンシーや知識を高めることが、生徒エージェンシーを高めることにつながると考えられる。

学年別の結果では、1年生はコンピテンシー全般の影響が見られたが、2年生では、「より良い社会への意識」の影響が強くなり、3年生では、「メタ認知力」の影響が強くなっていた。「メタ認知力」の影響が強くなる理由としては、高校受験が影響していると考えられる。生徒は受験に向けて学習する中で、自ら学習する目標を設定し、学習計画を作成し、目標や計画が達成できたか確認する作業をくり返す。この作業はまさに、生徒エージェンシーで核となっている、目標設定、ふり返り、自律的な判断・選択という3要素と関連していると思われる。そのため、3年生で特にメタ認知力が生徒エージェンシーに及ぼす影響が大きくなったと考えられる。

以上のように、3学年全体と学年別の双方の重回帰分析において、「メタ認知力」と「より良い社会への意識」が生徒エージェンシーに正の影響を与えていた。「メタ認知力」の影響が見られたことについては、生徒エージェンシーの定義にふり返りという要素が含まれていることと関係していると考えられる。すなわち、自己と課題について俯瞰して認識し、工夫する力の強さは生徒エージェンシーを高める効果をもつと考えられる。「より良い社会への意識」の影響が見られたことについては、自分自身だけでなく、クラス・学年・授業・社会といった対象をより良くしたいという気持ちの強さは生徒エージェンシーを高める効果をもつことを示している。以上より、自己や課題を俯瞰する力を伸ばすことや、「より良い」と思う周囲や社会のウェルビーイングを高めようとする意識を伸ばすことは、生徒エージェンシーを高めることにつながるといえる。

また、知識獲得量の自己評価を学年別に分析すると、どの学年も生徒エージェンシーに有意な影響を与えていなかった。これは、3学年全体での分析結果と異なる。このことから、生徒が日々の学習を通して知識を増やすことによる生徒エージェンシーへの影響は

限定的である可能性がある。3学年全体での分析結果と併せて考えると、知識量の影響は「知識が生徒エージェンシーを育成する」というものから「知識が生徒エージェンシーを阻害しない」というものまで幅があると考えられる。加えて、本研究では「授業での学びや活動の中で、知識をたくさん得ることができた」と尋ねることで知識量を測定した。そのため、知識の深まりについて、例えば、知識間の関連の強まり・知識同士のつながりの再構成といった側面と生徒エージェンシーの関連については未検討であり、今後の検討課題であることに留意する必要がある。

#### 4. 4 社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングとその対応関係について

社会をより良く生きる上で大事だと思うことについては、ウェルビーイングの分野によって選択数にばらつきが見られた。

社会を生きる上で、幸福感や収入、健康といったものは非常に大事であると中学生から考えていることは、健康に働いて十分な収入を得て、幸福感を持ちながら生活するというライフスタイルを反映した結果であると推測される。また、環境やワークライフバランスが入っていたことは、昨今の海洋プラスチックごみ問題や働き方改革の報道や授業での学習等が影響していると考えられる。一方、市民参加の選択数が少なかったことは、中学生にとって民主主義に基づいた社会や政治への参画が想像しにくく身近な事柄ではないことを示唆していると思われる。中学生の時間的展望は発達途上であり、自身が大人になり、社会人となって社会の中で生きていくことを想像するのは、やや難しい。より良い社会の実現よりも、まず、具体的に想像しやすい経済的・社会的自立や個人としてのより良い暮らしを実現することの方に主眼が向いている可能性がある。そのため、社会生活を営む上で必要な要素の選択数が多く、市民参加の選択数が少なかったのであろう。また、メディアや身近な大人から伝わってくる、その時々により良く社会を生きるために必要といわれる要素が、より選択される傾向があると思われる。そのように考えると、中学生が社会をより良く生きる上で大事だと思うことは、本人の志向や考えに加え、状況や学習からも影響される可能性があるといえるだろう。同時に、異なる状況・学習に接した場合は今回と異なる結果が得られることも考えられる。そのため、今回対象とした生徒とは異なる状況・学習に接している対象として、今後、別の学校で調査を実施し、今回の結果と比較することが有意義であるといえる。

ウェルビーイングの分野間の対応関係については、私的な領域と公的な領域という次元と、自己実現に関する領域とより生理的な欲求に近い領域の次元が見られた。また、生徒が大事だと考えるウェルビーイングの分野は3パターンに分かれる可能性が示唆された。具体的には、生徒は、より良く生きる上で大事な要素を衣食住に関するような生活を営む上で必要な要素に関係する事柄、安全で健康に生活する上で必要な事柄、社会とのつながりに関係した事柄の3つをそれぞれ分けて考えている可能性があることが分かった。

## 5. まとめ

本研究では、まず、生徒エージェンシーの関連要因として、コンピテンシーと知識獲得量の自己評価を想定して検討した。その結果、コンピテンシーと知識獲得量の自己評価の双方が生徒エージェンシーを高める効果を有していた。また、学年によって、生徒エージェンシーに影響を与えるコンピテンシーが異なっていた。

さらに、中学生が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングの分野について検討した結果、幸福感や収入、健康といった分野を重視していることが示された。そして、中学生が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングの分野には3つのパターンが見られ、それぞれを分けて捉えている可能性が示された。

本研究は、OECDにより提唱された新たな概念である生徒エージェンシーの測定を試み、生徒エージェンシーの関連要因を示したことで基礎的資料を提供することができた。

人が社会の中で他者と共存し、生活していくためには、自己の幸福追求だけでなく、他者と調和しながら、時に他者の幸福を追求することで、それが結果的に自己の幸福につながったり、社会全体の幸福につながっていったりすることも多いといえる。周囲との調和・協働により主体性を発揮していくエージェンシーは、共同エージェンシーと呼ばれる。今後は、共同エージェンシー、生徒エージェンシー、ウェルビーイングの関連を検討していくことで、児童・生徒のエージェンシーについて、より深い知見を得ることが可能になるだろう。そのためには、生徒エージェンシー尺度のさらなる精緻化や項目の追加による測定の安定性の向上、尺度の信頼性、妥当性の確認を進め、共同エージェンシーなどの他のエージェンシーとの関連を検討することが必要である。そうすることで、より効

果的な学習に寄与する生徒エージェンシーのあり方やその要因を検討することが可能となり、学校場面においてエージェンシーを育むための教育方法の提案や開発につながっていくといえる。

## 6. 付記

本研究は、東京学芸大学「次世代型コンピテンシー育成のための教育方法開発とその国内外への発信」(文部科学省機能強化経費「機能強化促進分」対象事業)の研究成果の一部である。

## 7. 謝辞

本研究にご協力いただきました中学校の生徒および教職員の皆さまに深く感謝申し上げます。

## 8. 注

注1) 本論文においては英語読みの表記を用いる。

注2) 選択数と選択率の算出に当たっては、分野に丸をつけて選択をしていた場合は有効回答とし、評定していた場合や4つ以上または3つ未満の丸をつけていた場合は無効とし、欠損値として処理した。

## 9. 引用文献

- 1) OECD: The future of education and skills Education 2030, 2018  
[http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/E2030%20Position%20Paper%20\(05.04.2018\).pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf) (2019年9月5日)
- 2) OECD: OECD Future of education and skills 2030 conceptual learning framework: Concept note, 2019  
[http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/Student\\_Agency\\_for\\_2030\\_concept\\_note.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/Student_Agency_for_2030_concept_note.pdf) (2019年9月5日)
- 3) 前掲2)
- 4) OECD: The future of education and skills Education 2030 [Japanese], 2018  
[http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper\\_Japanese.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf) (2019年9月5日)
- 5) 前掲2)
- 6) Rychen, D. S., & Salganik, L. H. (Eds.): *Key competencies for a successful life and a well-functioning society*. Göttingen, Germany: Hogrefe & Huber, 2003

- (ライチェン, D. S., & サルガニク, L. H. (編著) 立田 慶裕 (監訳): キー・コンピテンシー——国際標準の学力をめざして——, 明石書店, 2006)
- 7) Griffin, P., McGaw, B., & Care, E. (Eds.): *Assessment and teaching of 21st century skills*. Dordrecht, Netherlands: Springer, 2012  
(グリフィン, P., マクゴー, B., & ケア, E. (編著) 三宅なほみ (監訳): 21世紀型スキル——学びと評価の新たなかたち——, 北大路書房, 2014)
- 8) Fadel, C., Bialik, M., & Trilling, B.: *Four-dimensional education*. Center for Curriculum Redesign, TN, USA: Lightning Source, 2015  
(ファデル, C., & ビアリック, C., & トリリング, B. (編著) 岸 学 (監訳): 21世紀の学習者と教育の4つの次元, 北大路書房, 2016)
- 9) 関口 貴裕: 「OECDとの共同による次世代型指導モデルの研究開発」プロジェクト——平成28年度研究活動報告書——, 東京学芸大学次世代教育研究, 2017
- 10) 関口 貴裕: 日本の学校教育における各教科等の学びで育成可能なコンピテンシーの関係性, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 69, 179-189, 2018
- 11) OECD: *Skills for social progress: The power of social and emotional skills*. Paris, France: OECD Publishing, 2015
- 12) 前掲2)
- 13) OECD: OECD better life index.  
<http://www.oecdbetterlifeindex.org> (2019年9月5日)
- 14) 前掲10)
- 15) 西村 多久磨・河村 茂雄・櫻井 茂男 自律的な学習動機づけとメタ認知の方略が学業成績を予測するプロセス, 教育心理学研究, 59, 77-87, 2011
- 16) 前掲2)
- 17) 前掲2)



# 中学生における生徒エージェンシーの関連要因および中学生が重視するウェルビーイングの分野

## The related factors of student agency in junior high school students and the topics of well-being which they attach importance to.

扇原 貴志\*・柄本 健太郎\*・押尾 恵吾\*

OUGIHARA Takashi, TSUKAMOTO Kentaro and OSHIO Keigo

次世代教育研究推進機構

### Abstract

In this study, firstly we examined relation between student agency and competencies in a sample of 347 Japanese junior high school students. A self-report measure of student agency, competencies, and students' self-evaluating the degree of knowledge acquisition was administered. Regression analyses revealed that, competencies and self-assessed knowledge acquisition positively effected on student agency and indicated the differences of relations among variables by grade. Secondly, we investigated self-report inventory about well-being for living a better life in society. As the results, junior high school students emphasized subjective well-being, income, and health status as important for their better lives among various type of well-being. And a correspondence analysis revealed that well-being can be likely grouped into three categories in the case of junior high school students. Findings are discussed in terms of importance for foundational and exploratory study of new concepts proposed by the OECD.

**Keywords:** student agency, competency, well-being, Better Life Index, junior high school student

*Reseach Organization for Next-Generation Eduation, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究の第1の目的は、中学生を対象に生徒エージェンシー (student agency) を測定する尺度を作成し、生徒エージェンシーとコンピテンシー (資質・能力) および知識獲得量の自己評価との関連を検討することであった。第2の目的は、中学生が社会をより良く生きる上で大事だと思うウェルビーイングについて検討することであった。中学生347名に質問紙調査を実施した。重回帰分析の結果、コンピテンシーと知識獲得量の自己評価の高さは、生徒エージェンシーの高さを予測していた。同時に、学年によってその関連は異なることが示された。中学生が重視するウェルビーイングについて検討した結果、生徒は、幸福感、収入、健康といった分野のウェルビーイングに対して社会をより良く生きる上で重要であると考えていた。また、コレスポ

---

\* Tokyo Gakugei University Research Organization for Next-Generation Education (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)



ンデンス分析の結果、生徒はウェルビーイングを3つのパターンに分けて捉えている可能性が示された。本研究はOECDにより提唱された新たな概念である生徒エージェンシーの測定を試み、その関連要因を探索的に検討したという点で、基礎的資料を提供することができた。

キーワード: 生徒エージェンシー, コンピテンシー (資質・能力), ウェルビーイング, Better Life Index, 中学生